

例会会場変更しました。第102回例会は下記の通り行います。

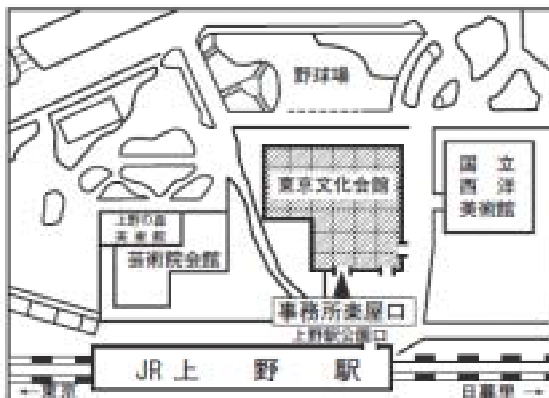
## 第102回例会のご案内

日 時：2005年9月21日（水）18:30～

内 容：毎田佳奈子氏（港区教育委員会）  
「最近の港区内の発掘調査」（仮題）

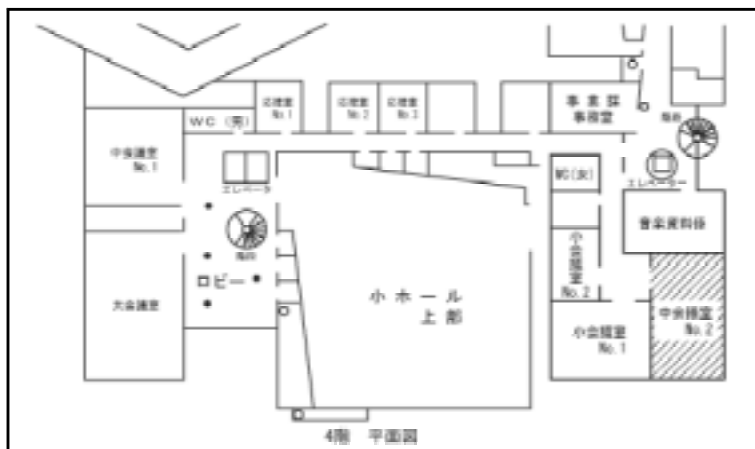
会 場：東京文化会館 4F 中会議室

交 通：JR山手線上野駅 上野公園口改札  
徒歩1分  
東京メトロ日比谷線、銀座線上野駅  
7出口 徒歩5分



問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室  
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト  
<http://www.ao.jpn.org/edo/>



◇江戸遺跡研究会第101回例会は、2005年7月20日(水)午後6時30分より江戸東京博物館学習室に◇  
◇で行われ、水本和美氏より、以下の内容が報告されました。◇

## 新宿歴史博物館『江戸のデザイン』展について

水本和美

(新宿区歴史博物館)

### はじめに

新宿歴史博物館では平成15年度から、当館の所蔵する歴史、美術・工芸、考古、文学などの各分野の資料について、区民を対象に一般に紹介するため「所蔵資料展」を行っている。筆者は、平成16年度の考古資料についての所蔵資料展を担当し、「江戸のデザイン」というテーマで展示を行った。今回の例会で、展示内容とそこで考えたことについて発表させていただいた。

### 1. 展示の概要

展示は、新宿歴史博物館地下1階企画展示室で行った。展示資料については表を参照されたい。当初予定期間は2005年3月19日(土)から5月29日(日)であったが、最終的に6月3日まで会期を延長した。実質は全65日間の観覧者は2,744人、1日あたりの観覧者を平均すると42.2人である。ちなみに観覧料は無料である。展示にあたって、同一テーマの考古学講座も開催した。講座の内容や講師は、次の通りである。

第1回；2005年3月5日(土)「江戸のハヤリと泥メンコ」(講師：仲光克顕氏)

第2回；2005年3月12日(土)「瓦の軒先デザイナーその流行と「家紋」一」(講師：金子智氏)

第3回；2005年3月19日(土)「江戸のデザイナー-当館所蔵資料を中心に-」(筆者が担当し、後半に展示解説を行った。)

第4回；2005年3月26日(土)「茶の器をとおしてみた海外との交流」(講師：堀内秀樹氏)

入館者には考古学講座の受講者が含まれる。受講者以外の一般の観覧者からも、設置したミュージアム・ポストなどへの投書があり、その反響は概ね好意的であったと思う。周知の方法は、新宿区生涯学習財団の広報誌への掲載とA2版のカラーポスターによった。タイトルやポスターのイメージから、染織などの展示を期待された方もいたようである。

### 2. 展示テーマ「江戸のデザイン」とこれを選んだ理由

江戸遺跡出土資料についての研究成果をふまえ、新宿区内の江戸遺跡から出土した陶磁器・土器類と瓦を中心とし、描かれたあるいは象られた文様・図とその主題を紹介したものである。

当館では、前年まで「遺跡展」と冠して当該年度に行った遺跡の調査成果を紹介してきた。そこでは、個々の遺跡を紹介するというテーマがあった。これに対して、今回の展示では、遺物からの情報をどのように読みとることができるか、文様・モチーフの意味から紹介することとした。

出土資料には、割れた状態のものも多いが、そこから情報が読み取れることを、ここでは「デザイン」を切り口として知ってもらいたいというねらいもあった。しかしながら、この点については、破片資料を提示できず、また写真パネルを活用できなかったという反省がある。

### 3. コーナー

展示にあたっては、図・文様を中心とした次の小テーマを設定し、資料を紹介した。展示手法の工夫としては、コーナータイトルにイメージカラーをのせた正方形パネルを使用した（写真図版参照）。解説パネルはそれぞれ小コーナーごとに設けた（例会発表では、個別テーマについてパワーポイントにより紹介した。表1・表2参照）。

以下にそのテーマをあげておくと、デザイン・文様・モチーフの世界を網羅した上でそれらを分類したものではない。あくまで、一般の方々が個々の江戸時代の遺物の文様・モチーフなどを見る出発点に選んだものである。

1) ねがいをたくす～吉祥文の世界～

2) 水滴

3) 江戸の流行と泥面子

4) 瓦の文様と家紋瓦

5) 山水楼閣

6) 花鳥

7) 動物

8) 龍と鳳凰

9) 海外との交流

10) 人物

11) 京焼と京焼写し

12) あそびどころ

### 4. 展示を行った中で考えたこと

#### (1) 「デザイン」について

**形** ものにある可視的な情報のうち、形もデザインうちに含まれる。形は機能に関わる部分がある。この点、新宿区・内藤町遺跡では「器類」・「器種」・「器形」などの概念区分を行っている。様々な器種や、「茶の文化」、茶の器の変化など提示できる材料はあったのだが、今回は下記の文様・図に重点をおき、「形」については展示では筆者の力量不足でここまで踏み込めなかった。

**文様・図** 形に付与される付加的な意味合いだけでなく、機能に関連して、「どこをみるか」「みられるか」によって、施文部位が選択されているのではないかと考えた。

碗・皿などをみると、その文様には主・副が存在する。例えば、土瓶は実測図作成の際の経験則によるものであるが、主文様が決まった位置にくることが多いように思われる。

また、瓦の軒先の文様（瓦当文様）は、どこがみられるのか、ということを明確にしている。瓦は、建物に「固定」されて見られるものである。これに対して、食膳具などは動作にともなって見られる場所が変化する。実はそこに、「だれがみるのか」という問題が存在するのだが、その認識が欠けていたのかもしれない。動作の主体者（＝使用者）が必ずしも文様を見る側であるということではなく、そこにいる他者に向けた文様・図がある可能性がある。

さらに、泥面子の文様・モチーフなどは、泥面子の本質に深く関わるものである。付加的な文様と本質的なものを分け、文様の主・副をその存在も含めて判断することは、資料の性格を考えるためには必要ではないか。

**その他** 色や重さ、質感、などほかにも様々な要素があるがこの展示ではとりあげていない。

## (2)文様・図について

「陶磁器」を「鑑賞」するには雰囲気や全体の印象が関係する。しかし、考古学研究では、おおむね「材質→器種→製作技法・形態・文様」と、属性を細かくすることによって、資料を評価していく。樹脂状に分かれた分類概念上同一のレベルに位置付く資料を比較することは多いが、一旦枝の根元で分かれたものには比較検討の機会が少なくなる。ところが、今回は展示を行うことにより、材質を横断的にみることができた。

## (3)陶磁器、泥面子、瓦の先行研究

**陶磁器類** 大橋康二氏は、17世紀前半の肥前磁器の文様を紹介している（『古伊万里の文様』）。ここでは、網羅しきれないので、もっとも大きな分類項目のみを記しておきたい。

「1. 植物、2. 動物、3. 建造物・器物、4. 自然、5. 吉祥・幾何、6. 文字」

**泥面子** 仲光克顕氏 泥面子のモチーフについての研究 1997『江東橋二丁目遺跡』

仲光氏は、上記報告で「真円盤状のもの」であるⅠ類について、18種の分類項目を設定している。以下にこの分類部分を引用する。

「Ⅰ-a類：文字、Ⅰ-b類：十二支に関するモチーフ、Ⅰ-c類：動物、Ⅰ-d類：植物、Ⅰ-e類：火消し、Ⅰ-f類：歳時・信仰、Ⅰ-g類：縁起物、Ⅰ-h類：流行、Ⅰ-i類：名所・風景、Ⅰ-j類：商品・広告、Ⅰ-k類：物語・伝承・諺など、Ⅰ-l類：化物・妖怪、Ⅰ-m類：人物、Ⅰ-n類：事物、Ⅰ-o類：家紋類、Ⅰ-p類：幾何学・連続文、Ⅰ-q類：両面施文、Ⅰ-r類：その他・不明である。また、これらのうち必要に応じて細分した」

同報文中に細分を含め、かつ統計的な内容も記載されているので参照されたい。こうした分析を

蓄積することによって、江戸時代の流行について知ることができるであろう。

**瓦** 金子智氏による瓦の瓦当文様についての研究では、①家紋瓦、②江戸式・大坂式・東海式の瓦について知ることができる。新宿区内で出土した家紋瓦を大名家の位置を示した資料とともに展示した。講座も好評であった。

#### (4)動物モチーフ

この部分は、今橋理子氏の『江戸の動物画 近世美術と文化の考古学』を参考にした。

風景（山水）と花鳥、動物を主題とした文様・図について、以下のように区別した。

○写實的に写したもの

○図案化されたもの

A. 組み合わせが固定化されたもの

B 簡略化の行われたもの

C 動物モチーフの扱い

動物モチーフの扱いについてもさらに、以下のように細分した。



**写實的に蝉を写す**



**豚に見立てた**



**猿を擬人化した**

※については、発表時の質疑で特に疑問の声があがったところである。

#### (7)「茶」 建築・やきもの・室内装飾・料理

広範に「デザイン」を考える上で「茶」は有効である。

#### (6)京焼から派生して考えたこと

新宿区出土の京焼や肥前の京焼風陶器などを展示したほか、若松文碗の文様の変化なども資料によって提示した。

#### (7)試用期間の長さ与设计の変化

例えば、瓦の使用期間と、食器の使用期間、泥面子の使用期間はそれぞれに異なっていると考えられる。こうした使用期間も、文様・図の選択に関わってくるだろう。

## (8)題材の選択とももの性格

花鳥・山水など東洋画や日本画などの画題になるモチーフ

力士・役者・実在の名所など浮世絵の画題になるモチーフ

例えば、染付皿などには唐人・唐子などが描かれているが、泥面子のモチーフには役者や力士など名前を持つ人物が描かれている。このような例として、山水文と「両国橋」などを比較すると、前者には理想化、図案化といった傾向がうかがわれるのではないだろうか。後者には実像あるいは逆に象徴化などがみられる。

ただし、新宿区・南山伏町遺跡、新宿区・新宿一丁目遺跡、豊島区・雑司が谷遺跡などで、市川団十郎の定紋を入れた染付の蓋物、広東碗などがみられる。統計的な操作を経ていないが、このような文様が磁器に施されるのは、例外的なものであるように思われる。陶磁器については、こうした文様を見逃してきた可能性があるかもしれず、今後再検討していきたいところではある。



南山伏町遺跡出土の蓋物

## まとめ（例会時点）

実際に資料を展示するには、物理的にどこかに並べる必要がある。概念的には一つの資料が重複した意味をもつことがあるため、文様・モチーフが独立した分類とならず重複する場合もあった。その際には、どちらかを筆者が選択して配置することとなった。

別の材質と比較することで、ものの本質みえる可能性があると思われる。

今後の課題としては、個別研究の深化はむろんのこと、考古資料以外の絵画・工芸・織物などといった分野について広く知ることが大切であると痛感している。また、今回材質の比較を通じて気づいたような理解が考古資料として「残された」ものを理解することにも役立つのではないか。相対的な概念を用いていくにあたっては、遺跡の空間的な分析や遺構からの情報などの積み上げは欠かせない。

具体的にこうした研究を進めていく上では、個別資料のデータの共有（例えばデータベースの構築）や、泥面子などでは拓本作業などが必要となってくる。文様やモチーフの解釈を行っていく上で、浮世絵などの絵画資料をはじめ、文学などの広く江戸文化全体にまたがる領域からの支援が必要である。江戸遺跡からの出土資料をその俎上に乗せるために、私たちがこれらの資料の情報の共有化を図っていく必要があるであろう。

考古資料として資料を見るのではない一般の観覧者にとっても、文様に解説を加えた結果、興味を持ってもらえたようである。発信の方法として、「展示」は非常に有効と考える。

## 補足1 - 例会発表へのコメント -

例会の発表内容についてご教示をたくさんいただいた。これらについては、未だ整理できていないため、今後少しずつ答えを出していきたいと思っている。今後の自らへの指針としても、ここに記しておきたい。

- (1) 江戸のデザイン、あるいは「デザイン」というものについての定義づけが必要である。
- (2) 材質を横断あるいは器種を横断する根拠や比較してよいといえる点を示す必要がある。
- (3) 陶磁器と泥面子の文様など、もともと異なる分類概念をもつものを比較することの意味と手続き→同一の分類を用いるべきである。
- (4) 動物モチーフの中で、「擬人化」として単純には片付けられない点がある。
- (5) 研究を深化させる上では、情報の共有化が必要であり、そのための方法についても考えていかななくてはならない。

## 補足2

上記の指摘を少しずつ解決していこうと考え、ここで若干の補足を行っておきたい。

### (1) 「見立て」という切り口で取り上げた「蚊遣り豚」について

展示した資料は、内藤町遺跡（1次調査）のC-124号遺構から出土したものである（第129図409）。内藤町遺跡調査会による『内藤町遺跡』（1992）では、特殊な器類として蚊遣り類をあげ、「蚊を燻すための火鉢。通常は火鉢・焜炉類が用いられたが、江戸後期には特殊な形状の「蚊遣り豚」と「蚊遣り達磨」が現れた。（以下略）」とある。川柳にみられることが指摘されている。同報告中には、蚊遣り豚出現以前には蚊を燻す方法として、火鉢・焜炉・七厘が用いられており、文化11（1814）年の『大和名所図絵』の農家の夕涼みの図に火鉢を用いたものがあることなどが示されている。他にも内藤町遺跡の蚊遣り豚が現代のものより大きなサイズである点を、明治初年（1868）に殺虫成分のある除虫菊が輸入されるまで煙のでる材料を燻していたのみで、除虫菊の栽培が明治18（1885）年以降、蚊取り線香が使われ始めるのは明治20年代以降で、小型の蚊遣り豚出現をその時期以降としている。

町田忍氏は、大正4年6月10日の東京朝日新聞にある「蚊よけ」の広告を紹介している（町田忍

2001『蚊遣り豚の謎 近代日本殺虫史考』)。ここに「豚器」という名称がみられ、渦巻状の蚊取り線香とともに内藤町遺跡出土のものに類似した形態の製品が描かれている。上部には取っ手が付き、鼻の部分からは煙が出ている。

蚊遣り豚は瓦燈や徳利などを横にした形で豚に見立てたとしたのだが、観覧者が意識したのは、「なぜブタなのか？」という点である。

江戸時代においてブタがどれほど知られていたのか。これは「ブタ」に「見立て」る行為を考える上で非常に重要な点である。ブタ・イノシシについては、西本豊弘氏による動物考古学の立場からの研究、塚本学氏の江戸時代人と動物との関わりとの研究などがある。これらを参照すると、江戸時代の人々にとってブタはそれほど遠い存在ではなかったようである。塚本学氏が指摘するように、元禄以前にも太ったひとのあだ名に「武太之助」（ぶたのすけ）と付けている例を南方熊楠が見出している（『猪に関する民俗と伝説』平凡社1971『南方熊楠全集 第1巻 十二支考』）。また、「猪」＝ブタ、「野猪」＝イノシシとある。しかし、なお残るなぜブタなのか、という疑問。熊楠の記した中には、「豕が泥中に転がること、人に飼われたのち始まったのではなく、野猪すでに泥中に転がるを好み、これをヌタを打つという。蟲、蚊を防ぐため身に泥を塗るのだそうな。」という箇所がある。なぜブタか。という点についてはいまい少し、考えてみたい点である。

## (2) 「三升到海老」、市川団十郎

「三升」は、江戸時代の歌舞伎役者、市川団十郎の定紋である。団十郎は荒事で知られ、江戸時代の歌舞伎役者の中でも人気を博したようである。東洲斎写楽の大首絵でよく知られるのは、五代目団十郎という。泥面子にみられる団十郎を示す文様としては、「三升」や「三升到海老」、のほかに団十郎が得意とした「矢の根」などの役柄が意匠化されているものがある。

### 新宿区・南山伏町遺跡（新宿区南山伏町遺跡調査団1997『南山伏町遺跡』）

調査地点は新宿区南山伏町16番地に位置し、貞享2（1685）年から元禄2（1689）年には200俵～350俵の5軒の旗本屋敷地に該当する。

第74号遺構（地下室）から出土した肥前系磁器の蓋物蓋と身には、「三升到海老」文が染付されている（図70-1・2）。推定製作年代は、1790年代～1860年代である。遺構の年代は、同遺跡で旗本1区のⅢ期のうち、宇佐美家拝領期（1828年～）の19世紀第2四半期頃に位置づけられる。

同遺跡では、旗本1区のⅢ期の宇佐美家拝領期（1828年～）の19世紀第3四半期頃に位置づけられるごみ穴（第70号遺構）から出土した23個体の泥面子の中に、瓢内に「八代目」の文字がある八代目市川団十郎をモチーフにしたものがみられる（図67-36）。八代目団十郎は、天保9（1838）年に団十郎を襲名、嘉永7（1854）年に自刃している。泥面子では他にも、幕内在位が弘化3～安政7（1846から60）年の力士名「猪王山」の文字が入ったものも相伴している。やはり旗本1区のⅢ期の宇佐美家拝領期（1828年～）の19世紀第3四半期頃に位置づけられる第181-a号遺構から「鎌に矢にせぬ」（かまやせぬ）の泥面子が出土している。また、旗本1区では、第51-a号遺構、上記第7



0号遺構、第88-a号遺構、上記第181-a号遺構から芥子面が出土している。

南山伏町遺跡では、遺構間接合の結果について榎木真氏による検討が行われている。この5つの屋敷地では一部屋敷地間の接合関係がみられるが、概ね屋敷内で接合線が完結している。旗本1区においては、第70号遺構と第74号遺構、他に第19号遺構をあわせて3つの遺構にごみ処理における関係性がありそうである。

#### **新宿区・新宿一丁目遺跡**（新宿区生涯学習財団2001『新宿一丁目遺跡Ⅰ』）

調査地点は新宿一丁目30番1号に位置し、『御府内沿革図書』によると「百人組与力大縄地」、鉄砲百人組の一組である二十五騎組与力の組屋敷大縄地の一角に相当する。この遺跡の第95号遺構から、「三升到海老」文の染付文様をもつ肥前系磁器の広東碗が出土している（第30図11）。口径は112mm、新宿区において内藤町遺跡以来行われている分類では中碗（口径91mm～120mm）に相当するサイズである。焼継されており、「イ」という焼継印を確認できる。この遺構では特に広東碗に焼継と焼継印が多いようである。第95号遺構は階段付の地下室で、総破片数7,671点・総重量724973.8gの遺物が出土している。70器種がみられ、碗・皿・鉢を中心としながらも、厨房具・貯蔵具など生活用具全般を含む。このうち、碗類は磁器が152個体（中碗67・小碗42・大碗20・紅猪口16・仏飯碗6・薄手酒杯1個体で構成）、陶器が120個体（中碗80・小碗25・大碗13・小坏2で構成、附表19参照。）である。中碗のみで147個体となる。

個別別資料の製作年代は、17世紀第2～19世紀第1四半期に含まれており、18世紀第3～第4四半期に偏りがある。この資料は1780年代～1840年代頃の製作と考えられ、その碗の入手に関してはその他の製品との時期差はみられない。

#### **豊島区・雑司が谷遺跡**（豊島区遺跡調査会2003『雑司が谷Ⅰ』）

調査地点は豊島区雑司が谷三丁目15番20号に位置する。この遺跡の113号遺構Bから「三升到海老」文の染付文様をもつ肥前系磁器の広東碗蓋（第85図768）、113号遺構A・Bから同様の広東碗（第90図829）が出土している。これらの碗と碗蓋は同遺跡において複数個体を確認している。829の口径は103mmで、上記の新宿区・内藤町遺跡の分類によると中碗に相当する。詳細は上記報告によりたいが、この地点は日蓮宗法明寺の鬼子母神の門前町屋に相当し、「飲食に関わる商い」を行っていたことを推測している。このため、これらの広東碗を含む遺物の多くはこの商いに関係したものであると考えられる。

上記の新宿区・新宿一丁目遺跡資料と豊島区・雑司が谷遺跡資料は、同一の文様である。

「三升到海老」または「三升」の文様は、いずれも市川団十郎（海老蔵）の定紋であろう。染付文様の施された資料はその推定製作年代から、五代目から七代目団十郎の時期に相当しよう。

染付と泥面子には、大きな違いとして2点ある。第1は製作地の問題である。ここでみられた染付文様の製品はいずれも肥前系磁器である。これに対して、泥面子は、その胎土と墨田区・江東橋

二丁目遺跡などの事例から江戸近郊で製作されたと考えられる。第2は製作工程の違いがある。この2点を比較すると、泥面子の方が江戸での流行を反映しやすいことは、想像に難くない。

展示した泥面子のうち歌舞伎役者を表す文様は、市川団十郎のみでなく、市川猿之助（沢瀉文）、市川九蔵（丸に縦長三入子升）、岩井半四郎（三扇）、大谷友右衛門（轡）、沢村宗十郎（丸にいの字）、瀬川菊之丞（結錦）、坂東玉三郎（玉）などがある。

これに対して、これらの歌舞伎役者の定紋を染付の文様として取り上げたものは、概して少ないのではないだろうか。それは、生産地や製作工程という問題以外にも、この材質を選択的に製作される器種による違いを反映してはいないだろうか。こうした問題を考えるには、絵画資料の領域で、浮世絵に取り上げられている題材と日本画などに取り上げられる画題を比較してみる必要があるだろう。浮世絵は美人画と役者絵が主要な部分を占めるが、ほかにも風景画、花鳥画、武者絵・物語絵、相撲絵、時局報道絵などが主題になっている（小林忠・大久保純一1994『浮世絵の基礎知識』至文堂）。

まだまだ、課題は山積みであるが、改めて江戸文化の研究の一端を江戸遺跡出土資料によって行っているということに気づかされた。この文章を執筆中、食べていた天乃屋の歌舞伎揚に「三升」の文様があることに気づいた。今の暮らしの中にも生きている江戸時代の文様がついても今後は考えてみたい。

表1 展示資料リスト

コーナー	資料名	遺跡名	遺構名	報文中の年代	材質	器種
ねがいをたくす～ 吉祥文の世界～	鉄・呉須絵中皿	内藤町遺跡	C区19号遺構	1820～	陶器	中皿
	瑠璃軸鶴亀浮彫文植木鉢	四谷三丁目遺跡	第19号遺構	1808～	磁器	植木鉢
	絵銭	弘方町遺跡	第596号遺構		銭貨（鉛製）	絵銭（鉛）
	銅製人形	円応寺跡	第79号遺構		銅製	人形
	銅製人形	円応寺跡	第79号遺構		銅製	人形
	銅製人形	円応寺跡	第79号遺構		銅製	人形
	銅製人形	円応寺跡	第79号遺構		銅製	人形
	銅製人形	円応寺跡	第79号遺構		銅製	人形
水滴	戯画墨書のあるかわらけ	神楽坂四丁目遺跡	31号遺構		土器	かわらけ小皿
	梅花文水滴	内藤町遺跡	C区27号遺構		陶器	水滴
	色絵十二単女人文水滴	市谷薬王寺町遺跡	第115号遺構	1690～1780年代	磁器	水滴
	人形水滴	住吉町南遺跡	第20号遺構		磁器	水滴
	布袋形水滴	内藤町遺跡	A区44号遺構	1750～1868	磁器	水滴
	虎形水滴	細工町遺跡	第33号遺構	1750～1860	陶器	水滴
	犬形水滴	細工町遺跡	第156・178・272号遺構		陶器	水滴
	犬形水滴	南伊賀町遺跡	第52号遺構	不明	陶器	水滴
	水鳥形水滴	内藤町遺跡	C区20号遺構	1808～	磁器	水滴
	硯箱文水滴	内藤町遺跡	C区56号遺構	1750～	陶器	水滴
	宝船形水滴	内藤町遺跡	A区48号遺構		陶器	水滴
江戸の流行と泥面子	鉄軸水滴	四谷御門外橋詰・ 御堀端町屋跡	第004・9号遺構		陶器	水滴
		内藤町遺跡				
		三栄町遺跡				
		南町遺跡				
		大京町東遺跡				
	「三入子升に海老の文」の蓋物	南山伏町遺跡	第74号遺構	1790～1860年代	磁器	蓋物（蓋・身）

土人形の世界	首人形 役者	市谷仲之町遺跡 (3次調査)	第17号遺構3層	18世紀前中	土製品	首人形
	首人形 役者	市谷仲之町遺跡 (3次調査)	第17号遺構3層	18世紀前中	土製品	首人形
	首人形 役者	市谷仲之町遺跡 (3次調査)	第69号遺構	18c後～19c	土製品	首人形
	首人形 役者	市谷仲之町遺跡 (3次調査)	第69号遺構	18c後～19c	土製品	首人形
	首人形 役者	市谷仲之町遺跡 (3次調査)	第69号遺構	18c後～19c	土製品	首人形
	首人形 役者	市谷仲之町遺跡 (3次調査)	第69号遺構	18c後～19c	土製品	首人形
	首人形 狐	市谷薬王寺町遺跡 (3次調査)	第69号遺構	18c後～19c	土製品	首人形
山水		市谷薬王寺町遺跡 (3次調査)			石	箱庭道具
	染付家屋文大皿	南山伏町遺跡	第59号遺構4層一括	1790～1860年代	磁器	大皿
	山水楼閣を象った箱庭道具	築土八幡町遺跡	558号遺構		土器	
	染付山水文大皿	内藤町遺跡	C区26号遺構	1800～	磁器	大皿
	山水を象った箱庭道具	築土八幡町遺跡	558号遺構	文久元(1861)	土器	
	山水を象った箱庭道具	築土八幡町遺跡	558号遺構		土器	
	呉須絵山水文土瓶	住吉町遺跡	第64・66号遺構	1780～1860年代	陶器	土瓶
染付山水楼閣文皿	若宮町遺跡(2次調査)	2号遺構	1690～1740年代	磁器	皿	
花鳥	染付鮑形波海鳥文皿	坂町遺跡	第4号遺構西側一括	1750～1790年代	磁器	小皿
	色絵蓋物	北山伏町遺跡			磁器	蓋物身
	藍色ギヤマン彫草花文小壺	矢来町遺跡	第2号遺構		ガラス	小壺
	染付松竹梅文皿	市谷本村町遺跡	第263号遺構		磁器	皿
	染付窓絵・松竹梅環文皿	市谷本村町遺跡	第263号遺構		磁器	皿
	染付松竹梅文鉢	坂町遺跡	第4号遺構	1690～1740年代	磁器	中鉢
	呉須手辨花文大鉢	内藤町遺跡	C区170号遺構	明末	磁器	大鉢
	色絵花文碗	馬場下町遺跡	E層		磁器	中碗
	色絵菊花文碗	神楽坂四丁目遺跡	32号遺構	1690～1780年代	磁器	中碗
	瓢箪形のガラス製品	弘方町遺跡	第588号遺構		ガラス	?端置き
	染付花鳥文大皿	内藤町遺跡(3次調査)	1号遺構		磁器	大皿
	兔形	市谷仲之町西遺跡	第35号遺構		土製品	人形
	兔形	市谷仲之町西遺跡	第36号遺構		土製品	人形
	兔形香炉	市谷本村町遺跡	第263号遺構		陶器	香炉蓋
白磁鶴形小皿	内藤町遺跡	C区208号遺構	1780～1860	磁器	小皿	
福良雀型押文小皿	内藤町遺跡	A区132号遺構	1808～	磁器	小皿	
蚊遣り豚	内藤町遺跡	C区124号遺構		土器(瓦質)	蚊遣り	
鼠像	南山伏町遺跡	24号遺構1層		土製品	鼠	
鯉形掛花生	荒木町遺跡(2次調査)	208号遺構	1780年代～	陶器	掛花生	
蟹文貼付け土瓶	荒木町遺跡(2次調査)	642号遺構	1800年代～	陶器	土瓶	
鶏文蓋物蓋	市谷薬王寺遺跡 (2次調査)	遺構外		石製品	蓋物蓋	
鶴丸文大皿	弘方町遺跡	第596号遺構下層一括	1780～1830年代	磁器	大皿	
みみずく像	發昌寺跡	第15号遺構	瀬戸・美濃系II～III期	陶器	人形	
青花開鶏文皿	南伊賀町遺跡	第97号遺構	17C～18C初	磁器	筆架	
青花虎鹿鳥文皿	喜久井町遺跡	第1号遺構	不明	磁器	皿	
青磁波頭文筆架	南伊賀町遺跡	第97号遺構		磁器	五寸皿	
鶏形水滴	新宿一丁目遺跡	第2号遺構	1650～1690年代	磁器	水滴	
つつき兔	内藤町遺跡	C区106号遺構		土製品	人形	
貝上猿座像	内藤町遺跡	A区110号遺構		土製品	人形	
烏帽子被り、軍配持ち 猿像	早稲田南町遺跡	第24号遺構	17世紀後葉～18世紀前葉	土製品	人形	
袈裟、猿座像	早稲田南町遺跡	第24号遺構	17世紀後葉～18世紀前葉	土製品	人形	
獅子形摘みの印章	内藤町遺跡	C区216号遺構		石製品	印章	
@	市谷薬王寺町遺跡 (3次調査)			磁器		
走駒文碗	新宿一丁目遺跡	第14号遺構	1800年代～	陶器		
松馬文土製蓋物	坂町遺跡	第4号遺構		土器	蓋物	
呉須絵跳駒文碗	信濃町南遺跡	143一括	1780～1820年代	陶器	小碗	

龍と鳳凰	染付鳳凰文五寸皿	内藤町遺跡	C区208号遺構	1750～1800	磁器	五寸皿
	染付鳳凰文巻形水注	河田町遺跡	第B・009号遺構掘り方		磁器	水注
	色絵団龍文角皿	内藤町遺跡	C区	1680～1700	磁器	小皿
	染付雲龍文中皿	内藤町遺跡	C区208号遺構	1700～1800	磁器	中皿
	緑繪龍文散蓮華	内藤町遺跡	A区132号遺構	1818～1871	陶器	散蓮華
	染付雲龍文大皿	内藤町遺跡	C区20号遺構	1780～1820	磁器	
	緑繪雲龍文植木鉢	市町遺跡	第74号遺構	1800年代～	陶器	植木鉢
	龍文火入れ	市谷本村町遺跡	第311号遺構		陶器	火入
	青磁龍文小皿	荒木町遺跡(2次調査)	239号遺構	不明	磁器	小皿
	青海波に龍文の内盤状銅製品	市谷仲之町西遺跡(3次調査)	第44号遺構		銅製	内盤状製品
	青磁昇龍貼付文燭台	市谷砂土原町三丁目遺跡	第443号遺構		磁器	燭台
	人物	染付雲龍文小皿	信濃町南遺跡	第65号遺構下層	1760～1780年代	磁器
十二神符文筒型花生		市谷仲之町西遺跡	第94号遺構	1770～	陶器	花生
色絵唐人文碗		内藤町遺跡	B区592号遺構	1700～	陶器	小鉢
唐人形灯心押さえ		市谷砂土原町三丁目遺跡	第32号遺構4層		磁器	灯心押さえ
京焼と京焼写し	アイヌ人形	内藤町遺跡	C区128号遺構		土製品	人形
	「西行法師」立像	早稲田南町遺跡	第24号遺構	17世紀後葉～18世紀前葉	土製品	人形
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	C区208号遺構	1740～	陶器	碗
	「仁清」印 京焼碗	矢来町遺跡	第2号遺構	1640～1690年代	陶器	碗
	「清水」印の京焼風碗	矢来町遺跡			陶器	碗
	「小松吉」印の京焼風碗	矢来町遺跡	第13号遺構	1650～1720年代	陶器	碗
	「小松吉」印の京焼風碗	矢来町遺跡	第15号遺構	1650～1720年代	陶器	碗
	「清水」印の京焼風碗	矢来町遺跡	第15号遺構	1650～1720年代	陶器	碗
	「錦光山」印京焼花生	市谷本村町遺跡	第263号遺構		陶器	花生
	「錦光山」印京焼仏花瓶	市谷本村町遺跡	第263号遺構		陶器	花瓶
	色絵花生	市谷本村町遺跡	第310号遺構		陶器	花生
	若松文碗	住吉町遺跡	トレンチ検出一括		陶器	碗
	鉄・呉須絵若松文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1730?～1770年代	陶器	碗
	「晴山」印 唐花文火入れ	内藤町遺跡(3次調査)	1号遺構		陶器	火入れ
	色絵土器重ね角皿	内藤町遺跡(3次調査)	9号遺構	18世紀第2・4半期頃	陶器	重ね角皿
	色絵土器重ね角皿	内藤町遺跡(3次調査)	※※	18世紀第2・4半期頃	陶器	重ね角皿
	團文小皿	神楽坂四丁目遺跡	30号遺構	1750～1840年代	陶器	角皿
	胡蝶文小皿	神楽坂四丁目遺跡	30号遺構	1750～1840年代	陶器	角皿
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区46号遺構	1740～	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区48号遺構	1740～	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	C区208号遺構	1700～1860	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区44号遺構	1740～	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区48号遺構	1700～1860	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	C区140号遺構	1740～	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	C区208号遺構	1740～	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区53号遺構	1740～	陶器	碗
	鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区368号遺構	1740～	陶器	碗
鉄絵若松文碗	内藤町遺跡	A区422号遺構		陶器	碗	
鉄絵梅枝文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1700～1780年代	陶器	碗	
色絵花生文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1700～1780年代	陶器	碗	
色絵松竹文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1700～1780年代	陶器	碗	
鉄・呉須絵若松文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1730?～1770年代	陶器	碗	
鉄・呉須絵若松文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1730?～1770年代	陶器	碗	
鉄・呉須絵若松文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1730?～1770年代	陶器	碗	
鉄・呉須絵若松文碗	南山伏町遺跡	第424・425号遺構	1730?～1770年代	陶器	碗	
鉄・呉須絵若松文碗	市谷本村町遺跡	第995号遺構		陶器	碗	
海外との交流	色絵花生文碗	内藤町遺跡	C区1号遺構		陶器	中碗
	模蘭文大皿	内藤町遺跡			軟質磁器	大皿
	樹枝文碗	弘方町遺跡	第7号遺構2層一括	1850～1880年代	陶器	中碗
	人物風景文皿	弘方町遺跡	第615号遺構	1850～1890年代	陶器	皿
	落穂拾い・海浜風景文碗蓋	若宮町遺跡(2次調査)	盛土内	1860～1880年代	陶器	小碗蓋
	染付文字文碗と蓋	内藤町遺跡(3次調査)	1号遺構		磁器	碗蓋
	※染付文字文碗と蓋に同じ	内藤町遺跡(3次調査)			磁器	碗蓋
	コンブラ瓶	内藤町遺跡(3次調査)	9号遺構		陶器	瓶
	天目茶碗	四谷御門外橋詰・駒場堀町尾跡	第004・9号遺構	17世紀第1～第2四半期	陶器	茶碗
	江戸絵付薄手酒杯	内藤町遺跡	C区1号遺構	1808～	磁器	薄手小杯
あそびごころ	江戸絵付薄手酒杯	市谷仲之町西遺跡	第34号遺構	1800年代	磁器	薄手小杯
	人面墨書の瓦	市谷仲之町西遺跡	第90号遺構		平瓦	
	鬼福杯	南山伏町遺跡	第146・b号遺構		陶器	小杯

